

たからやちよ

(勝田のしし舞)



2021. 7. 1
(令和3年)



昔の人は「しし」という動物に踊りをさせて願い事を叶えようとしてきました。しし舞の「しし」はライオンではなく、「竜(りゅう)」などと同じように現実には存在しない想像上の生き物のようです。しし舞は1000年以上前に中国から日本へ入ってきたと言われていています。当時の人々はこれまで見たことのない「しし舞」を見て、大変な刺激を受けたことと思われます。このことが遠くの国から来たふしぎな「しし」をいつのまにか「悪いことを打ち払うもの」と思わせ、江戸時代には全国に広がっていくことにつながりました。

全国に広がっていくうちに、ある村では作物の実りを豊かにするために雨が降るように願い、またある村では暴風を止めるように願う、といったようにしし舞に願う内容も村によって変わり、しし舞の舞い方、形もその村独自のものへと変わっていきました。しし舞は各地によって異なりますがその種類は大きく分けて二つの種類があります。

①二人立ちのしし舞

一匹の「しし」に二人で前足と後足になって舞います。
一般に「しし舞」と言われるものです。



②一人立ちのしし舞

一匹の「しし」を一人がかぶって舞います。しし舞の数は複数で特に東日本では三匹が多いですが、中には九・十三匹で舞うものもあります。



八千代市内ではかつて10か所でしし舞があったことが確認されていますが、現在では「佐山のしし舞」と「勝田のしし舞」の2件のみとなり、たいへん貴重なものなので市の指定文化財になっています。今回は「勝田のしし舞」について説明します。

勝田のしし舞はかつて9月1日に円福寺と駒形神社で行われていましたが、現在では9月の第一日曜日に行われています。

この時期は台風が一番多く来て、農家では縁起えんぎの悪い時期とされ、各地で風よけや風水害よけの行事を行っている所が多くあります。

勝田でもこの日にしし舞が行われ、勝田の人たちは「しし」(=竜神(水の神))を鎮めるためにしし舞を舞って、水害が起きないように念じるとともに穀物こくもつが多く実るように祈ったことが勝田のしし舞の起源とされています。



三匹の「しし」がしし舞を舞っている様子



勝田のしし舞のしし頭がしら(オヤジ)

「しし」はオヤジ(父)、セナ(子)、カカ(母)の三匹です。「しし」の頭は木で作られていて、黒くぬられた上に赤や金で目鼻が描かれています。また、頭には山鳥の羽を付けています。そして舞う人の腰には太鼓たいこを付けます。しし舞はモトギリ(初心者)、ハタカケ(ベテラン)、タネ(先輩格)の順に舞います。午前中はお寺でハンシバ(半分)舞って、そのまま神社に移ります。

神社に着くと残りのハンシバを舞って中休みをします。休憩後モトギリが舞われた後、神社ではオヒネリ(小ぜになど)がまかれます。

午後は神社でモトギリ、ハタカケ、タネの順に舞った後、手踊(ておどり)、ミノコ踊(みのこおどり)を踊ります。

勝田のしし舞は何百年も失われることなく、地域の人たちの手により長い間守られてきました。この貴重なしし舞を今後も失うことなく守っていくためには、これからの時代を担っていく皆さんたちのような若い人たちの協力が欠かせません。

